論文にみる農山漁村とその幸福論

谷下　雅義 [1]

[1] 正会員　中央大学教授　理工学部都市環境学科（〒112-8551　文京区春日 1-13-27）
E-mail mtanishita.45e@g.chuo-u.ac.jp

本稿では，過去 30 年，農村（農業集落）・山村・漁村（漁業集落）という「地域」を対象とした論文数はどのように推移してきたか．そしてこの論文数の変動に農林水産省の予算は関係しているか．幸せ・幸福・生きがい・豊かさ・誇りといった用語また土木というフリーワードを含む割合はどれくらいか．そして農山漁村の幸福論についていかなる議論がなされているか，について整理を行った．その結果，農山漁村の論文数は減少しており，農村については非公共事業費との相関がみられたこと，農山漁村の幸せ・幸福・生きがい・豊かさ・誇りまた土木の割合は 10%以下であること，そして自然や家族，近隣との「つながり」や「循環」が幸福を構成することなどを明らかにした．

Key Words: *rural villeages, Eudaemonics, Civil engineering, CINII*

1. はじめに

小池(2023)[1]は「日本の津々浦々に人が住み続けられること」が理想の国土であり，そのためには「住む場所によらず，安全・安心，文化・教育，医療・福祉そして雇用が確保されること」が必要不可欠であり，このもとで「地域伝統文化・自然が保持され，日本文化の多様性が維持できる．」そして「個々の土木技術者が日々理想の国土のすがたを語るような社会こそが，理想の国土実現への第一歩であり，いま社会が土木技術者に求めることである」と主張する．卒業した小中学校が廃校となり，地区の人口がピーク時の約 1/8 になってしまった筆者も強く同意するものであるが，本稿は非都市部である農山漁村に着目する．

農山漁村における近年のキーワードの一つは「地方創生」である．これは地方消滅論，すなわち一部の地方は消滅するという議論が出発点であった．2014 年，まち・ひと・しごと創生法が作られ，地方創生の必要性が国民全体に急速に行きわたった．この副作用として「この地域はなくなる、もう何をやっても無駄だ」という諦めが生まれた [2]．その一方で，いわゆるバブル崩壊以降の長期的な経済の停滞さらにコロナ禍を経て，自然と人間の関係の中に，あるいは家族や友人との関係の中に，またあるいは仕事との関係の中に幸せが生まれるよう行動する人たちが登場している．そのような場所を求め，あるいはそのような場所をつくりだそうと，農山漁村に移住したり，自分たちの生きる場所をつくるソーシャル・ビジネス的起業をおこなう人たちが増えている [3]．

以上の問題意識のもと，本稿では以下の疑問について検討を行うことを目的とする．

- 疑問０：過去 30 年，農村（農業集落）・山村・漁村（漁業集落）という「地域」を対象とした論文数はどのように推移してきたか？そしてこの論文数の変動に農林水産省の予算は関係しているか？
- 疑問１：そのうち土木というフリーワードを含む割合は？
- 疑問２：また幸せ・幸福・生きがい・豊かさ・誇りをフリーワードに含む割合は？　さらにこのうち土木というフリーワードを含む割合は？
- 疑問３：農山漁村の幸福論についていかなる議論がなされているか？

これらを通じて，土木技術者が理想の国土を語るための一助となることを目指す．

2. 方法とデータ

疑問０－２：CINII(国立情報学研究所)を用いて論文数を検索して得られたデータから作図を行う．対象年は 1992-2022 年であり，年単位でデータを収集する．農村(農業集落)・山村・漁村（漁業集落）をそれぞれタイトルに含めて検索を行っている．すなわち，農山村は山村に，農山漁村は漁村に含まれることになる．なお，CINII における論文検索では，一部重複する論文があることに留意されたい（データベースの作成上の問題であると認識しているが，今回は重複も含めて表示された論

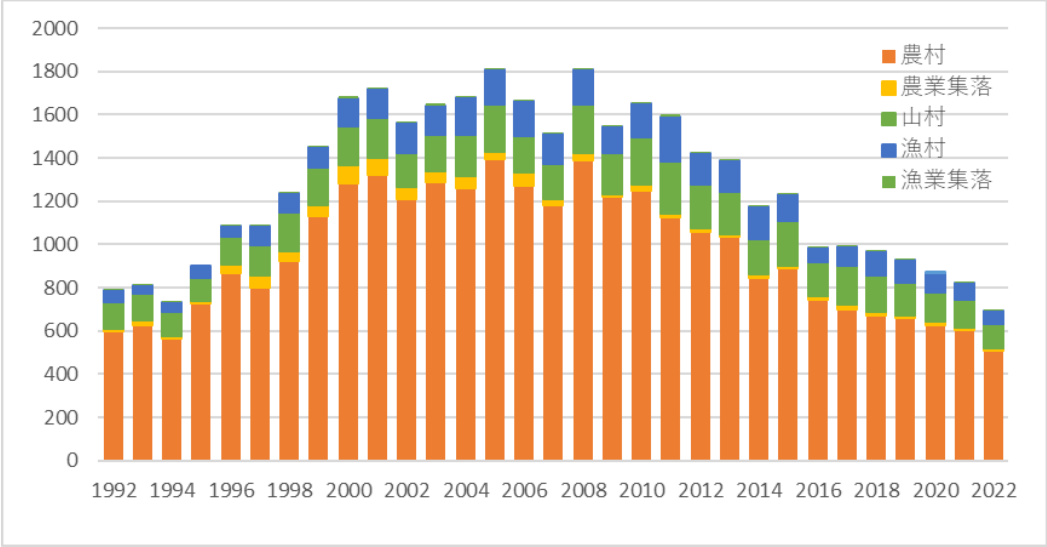


図-1　タイトルに農村（農業集落），山村，漁村（漁業集落）を含む論文数の推移

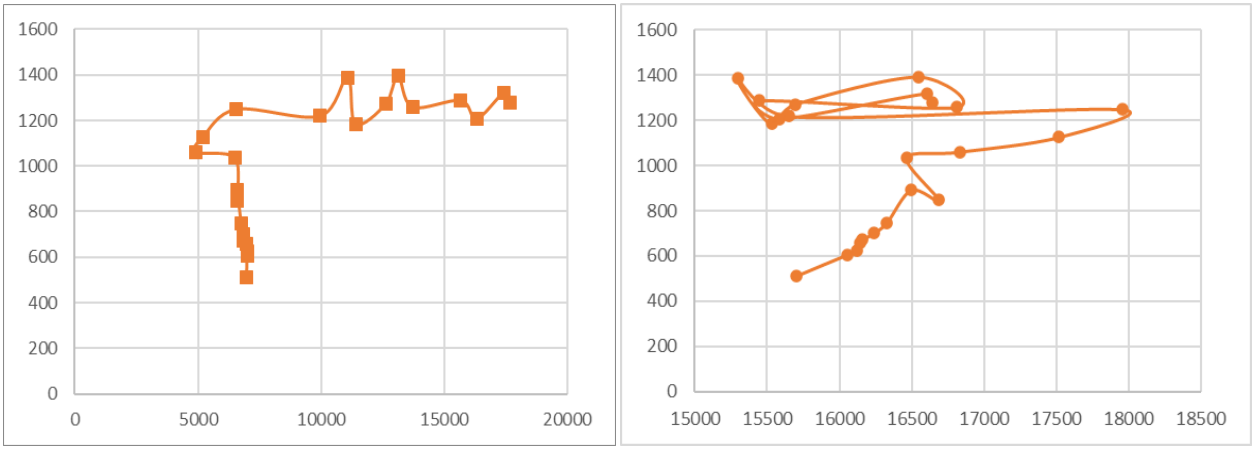


図-2　農林水産省の（非）公共事業費とタイトルに農村のつく論文数の散布図

文数を数値化した）．

疑問３：文献で得られている知見を整理する．

3. 結果

(1) 農山漁村の論文数の推移（疑問０，１）

結果を**図-1** に示す．ピーク時で最大年間約 1,800 本の論文が公表されている．推移をみると，1992 年からしばらく増加傾向であったが，2008 年以降減少傾向にあることがわかる．また内訳をみると 6 割以上を農村（農業集落）が占めることもわかる．次に，農林水産省の予算（公共事業費とい公共事業費）との相関をみたものが**図-2** である．公共事業費との間には相関はみられなかったが，非公共事業費については，ここ 10 年ほど予算の減少と論文数の減少が続いていることが読み取れる．

次にこれらの論文について，土木というフリーワードを追加し（すなわち，雑誌名や概要に土木という単語が含まれるもの）をカウントし，トータルの論文数に占める割合の推移を**図-3** に示す．

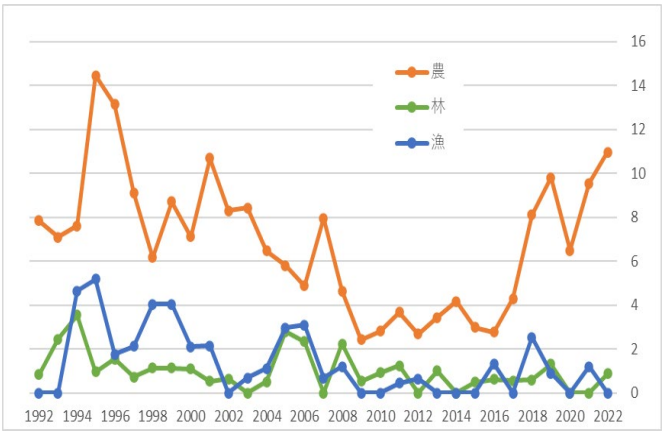


図-3 農村(農業集落)・山村・漁村（漁業集落）をタイトルに有する論文に占めるフリーワードに「土木」を有する割合の推移

表-1 フリーワード別論文数

	農村	山村	漁村	
幸せ	19	11	0	7,350
幸福	37	2	1	8,323
豊かさ	48	8	3	3,799
生きがい	28	6	2	3,276
満足	56	18	3	32,763
誇り	20	10	3	3,849
	30,744	5,172	3,689	
さらに土木を加えると				
幸せ	0	0	0	22
幸福	0	0	0	33
豊かさ	9	0	0	78
生きがい	0	0	0	15
満足	6	1	0	572
誇り	2	0	0	69
	2,033	51	46	

土木というフリーワードが含まれる割合は農村では，年によって多少の変動があるが，1 割程度，山村や漁村については 5%未満にすぎないことがわかる．土木においては必然的に「施設」や「事業」への関心が主であり，農村・山村・漁村という「地域」に着目した研究は少ないことを確認することができた．

⑵ 幸せ・幸福・生きがい・豊かさ・誇りをフリーワードに含む農山漁村論文数（疑問２）

農村・山村・漁村というタイトルがつく論文について，それぞれフリーワードに「幸せ・幸福・生きがい・豊かさ・誇り」それぞれの単語を有する論文数を 1992-2022 年で集計したもの，さらにこれらのうち，土木をフリーワードを含む論文数を**表-1** に示す．なお行頭が空欄となっている行については，農村・山村・漁村それぞれの用語を含む論文数であり，右側の空欄は，農村・漁村・山村をタイトルから除き，各行のフリーワードのみが含まれる論文数，一番下の行は，農村・山村・漁村をタイトルに有し，フリーワードに「土木」を含む論文数を示す．

この表より，農村・山村・漁村というタイトルがつく論文において，幸せ・幸福・豊かさ・生きがい・満足・誇りといった用語をフリーワードに含む論文はきわめて少なく，さらにそこに土木のフリーワードを追加すると 1992 年から 2022 年でわずか 18 にすぎなかった．

農山漁村において，幸せ・幸福・豊かさ・生きがい・満足・誇りは主たるテーマになってこなかったし，これらのテーマで論文を書くことは相対的に難しいことであると推測される．まして地域に関心を示してこなかったため，土木というフリーワードが追加されるとほとんど議論されていないことがわかった．

⑶ 文献にみる幸福論（疑問３）

では**表-1** の論文のうち，筆者が興味をひかれたものについてその概要を整理した（**表-2**）．これらの要点は以下のように整理される．

○幸福度は，農家の方が非農家よりも高い．
○幸福の最大の要因は「生きがい」であり，「所得」「相互扶助」「信頼関係」も影響を与える．安全性は は差がないと判断されると幸福度には影響を与えない．
○主観的幸福感は①長い居住歴に基づく集落への愛着意識，②家族や近隣との良好な関係，③農作業等仕事に従事していること．一方で，①家族に要介護・看病者がいる，②周囲にインフラが整っていないことへの不満感，③行政サービスへの不満感があると主観的幸福感が低くなる．
○農村住民は農山村での活動頻度が高く，また地域の食や農に関する行動頻度が高いほうが幸福度が高い．
○U ターンや I ターンの人たちにとって「人の少なさ」が幸福につながっている．

農林漁業を通じた自然とのつながり，また家族や近隣居住者とのつながりがキーワードであることが明らかになっている．

このつながりと幸福について，内田(2022)は次のように述べている [14]．

つながりを重視する日本やアジア．幸福は個人が感じるものでありながら．何を幸福と感じるかは実はその人が生きる時代や文化の精神，価値観，地理的な特徴を反映している．たとえば自然のなかで過ごすことで感じる幸福，消費のなかで感じる幸福は，どちらも幸せをもたらすものでありながら，前者はより自然豊かな地域で，後者はより都市的地域で感じられるものであり，農村部と都市部では幸せに関する考え方が違っているかもしれない．幸福はどのような状況に暮らす人もある程度理想とする感情状態でありながら，「どのように幸福を得るのか」はやはり文化によって異なっているのだろう．幸せな人というのは，周りの人とうまくつながっていて，つながっているからこそ周りの人を助けたりすることがある．そういう循環を通して，次の世代にいいものを渡していきたいという気持ちが醸成されていく．

そして幸福を感じている人は，ほかの人の意見も聞いてみようかとか，地域以外に住んでいる人の話もぜひ聞いてみたいとか．移住者を受け入れたいよねという．積極的な「開く力」を持っていた．

表-2　農山漁村の幸福論にかかわる論文の概要[4-13)]

廣政幸生	2019	幸福度は農家の方が非農家よりも高い。生活満足度についても、全般的に農家の方が非農家より高い。特に、農村部特有の近隣関係や農業を営むといったことについて顕著である。第3に、農家に関し、属性（経営規模、専。兼別など）及び世帯収入は幸福度に影響しないが、飼料用米作付け農家は幸福感が強い。しかし、その要因については不明である。第4に、非農家に関し、幸福度と世帯収入、自己資産評価との間に関係がある。第5に、総合的な幸福度に影響するのは、幸福構成要因及び住みやすさと収入であり、暮らしていく上で基本的な事柄である。第6に、地域が持つ資源の評価（自慢できるかどうか）は幸福度に関係している。
中條暁仁	2016	高齢者は農業生産者というよりも農産物の加工や販売を組み合わせた６次産業化の担い手として期待される。農産物加工に関する知識や技術を生活の中で長年蓄積しているため，その担い手としてふさわしい存在といえる。特に，農山村では女性高齢者を中心とする「女性起業」が全国に展開しており，男性中心の地域社会において自己の活動領域を確保しようとする女性たちの姿が見出される。都市農村交流においても，高齢者は農業体験や民泊体験など，農山村の日常生活を資源とした取り組みの担い手となっている。すなわち，伝統・文化の伝承者としての性格を有しており，都市住民との交流が農山村に住み続けることのインセンティブになっている点にも注目したい。また，これらの取り組みは，高齢者にとって経済的稼得手段の確保になっているという点でも重要である。農山村の高齢者たちは地域社会において多様なつながりを構築し，そこから生活維持に必要な手段的・情緒的なサポートを得ている。これらは，主として情緒的サポートの付与に機能し，生きがいの醸成に寄与している。このような高齢者をめぐるつながりの中でも，「他出子」との関係は最も重要な役割を担っている。出身村からそれほど遠くない地域に住む他出子は老親の生活をはじめ，自家農園での農作業など手段的サポートを提供したり，地域社会の運営を支えたりしている。また集落の近隣関係も，急を要するサポートの授受には離れて住む子どもより頼りにされやすく，生活維持に対して有意に機能している。高齢者の生活を通して，農山村には多様な社会的つながりのあることが読み取れる。近年の高齢社会研究では，高齢者を地域社会のお荷物として捉えるネガティブ・エイジングから，高齢者は生活条件の不利性に対応しながら農山村に住み続けており，高齢者の積極的な行動がそこに見いだされるのである。
佐々木宏樹	2016	主観的幸福度は一般よりも農村住民において高いものの、農村住民の女性と若手の幸福度が低い，一方でIターン者の幸福度が高いことが示された。また、農村住民は農山村での活動頻度が高く、また地域の食や農に関する行動頻度が高いほうが幸福度が高い
田中他	2014	UターンやIターンの人たちにとっては，人の少なさが幸福につながっている．気質がのんびりというのも高齢者にとっては幸福．噂話，干渉，交通の便の悪さが不満．
伊藤勝久	2014	・幸福の最大の要因は「生きがい」であり，「所得」「相互扶助」「信頼関係」も影響を与える．安全性は姑差がないと判断されると幸福度には影響を与えない．
野邊政雄	2013	幸福：①長い居住歴に基づく集落への愛着意識，②家族や近隣との良好な関係，③農作業等仕事に従事しているといった特徴がみられた。一方で，主観的幸福感が低かった回答者は，①家族に要介護・看病者がいる，②周囲にインフラが整っていないことへの不満感，③行政サービスへの不満感がある回答者で、あった。
国光他	2006	地域活性化の水準は，地域の各種活動に対する住民参加の度合いによって評価される傾向があること，地域活性化は，住民の満足度を高める効果があるとともに，農業用排水路のような地域資源の共同管理を助長する効果を有すること，耕作放棄地防止の点からは，活性化のみでは効果が薄く，農業振興が不可欠なことである。
松岡悦子	2003	インタビューの結果、2 つの高齢者グループが異なる満足感と自立の源を見出している。都市部の高齢者は、母親、妻、嫁、一家の大黒柱としての社会的役割を引き受ける必要がなくなり、行動や他人との関係においてより大きな自主性を享受できることが満足だと考えている。都市部の高齢者は、経済的豊かさ、質の高い人間関係などの資源を享受しており、これらはすべて比較的良好なレベルの教育を通じて獲得したものである。一方、農村部の高齢者は、外部の必需品に自分の生活を適応させることに満足感を見出していた。作物の成長や天候の変化、他者との共同作業など。彼らの日常生活は、互恵関係などの強い共同体生活の側面が特徴であり、日常活動には労働と娯楽の両方の要素が含まれていた。
小泉健	1997	１）国民満足度を利用した国土庁の分析によれば、中山間地を中心とする農村地域の生活環境施設の整備は都市部に比べて依然として大きく遅れている。２）社会資本の改善はシビル・ミニマムからアメニティ・ミニマムに変更されるべきであるが、農業地区ではシビル・ミニマムの改善はまだ完全に実施されていない。3）地方自治体の財政力を考慮すると、農村地域は都市地域とは開発段階が異なるため、都市地域を農業地域の最終開発段階とするべきではない。4）投資効果は農村地域の方が高く、都市地域では投資効果が低下している。5)農業環境改善調査では、どの市町村も農業生産性基盤の総合的かつ総合的な改善と生活環境施設の整備を強く求めている。実施にあたっては、地域の実態把握と財政的支援が重要である。6）農業インフラ整備にも発展段階がある。整備を進めるためには、農地の最終的な発展の様相を描くことが重要である。
武内和彦	1996	自然環境を尊重し，健全で美しい国土を形成することは，これからの国土計画の大きな課題の一つである。こうした課題に答えるために，これまで農業生産性の向上に特化していた農業・農村整備は，田園自然や田園風景の再生に資するという新たな役割を担うべきである。それは，農村生活の豊かさにつながるとともに，グリーンツーリズムなどを通じて，都市農村交流の促進にも寄与する。これからの農業・農村整備で重要なことは，生態学的技術の開発に基づく農村生態系の再生を目指すことである。また，農村生態系の適正な管理方法の確立，農村環境デザインの深化，東アジアの農村との交流などについてもさらに検討していく必要がある。

文献をもとに著者作成

4. 結論

以上，本研究では，土木技術者が農山漁村の幸福論を考えるための基礎資料を提供することを目指し，論文数の推移やこれまでの議論について整理を行った．得られた知見は以下の通りである．

1) 農山漁村の論文数は減少している．農村については非公共事業費との相関もみられた．
2) 1992-2022 年の農山漁村をタイトルに有する論文のうち，フリーワードに土木を含むものの割合は 10%以下である．
3) 同様に，農山漁村の幸せ・幸福・生きがい・豊かさ・誇りを議論しているものも 1 割以下である．
4) 自然や家族，近隣との「つながり」や「循環」が幸福を構成する．

農山村再生に長年取り組む小田切は以下のように述べている [15]．

農山漁村は，食料，エネルギー，水，CO2 吸収源として重要な役割を果たす国内戦略地域です．こうした地域がなくなってしまえば都市さえもなくなってしまう可能性があります．もちろん都市がなくなれば農山村もなくなるのですが，そういう意味では，都市農村共生という考え方が必要になってきます．農山漁村の重要性が，再び浮彫になってきたと言えると思います．

今後，女性を含め当事者意識を持った人々がいろんな方々と混じり合いながら，自分たちのこれからの生き方を創っていくことができる社会が望ましい．土木技術者はこれを支える基盤の整備（減災や生物多様性への貢献）そして雇用の確保にもつながる「小さな経済」を生み出す活動を，探究のみならず，できる範囲で実践していく必要があると考える．

REFERENCES

1) 小池淳司：理想の国土の姿を描く意義．土木学会誌，Vol.108, No.5, pp.14-17, 2023.
2) 小田切徳美：農山村は消滅しない．岩波新書
3) 内山節：新・幸福論．新潮選書, 2014.
4) 廣政 幸生：農村における幸福度の形成と要因に関する分析, 明治大学社会科学研究　紀要 58 (1), 49-61, 2019.
5) 中條暁仁：高齢者の生活にみる農山村の価値，日本地理学会発表要旨集, 2016.
6) 佐々木宏樹：主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析，新たな価値プロジェクト研究資料 第 1 号 農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発, 2016.
7) 田中里奈・橋本禅・星野敏・清水夏樹：農村地域住民の幸福度に影響する地域的要因の質的調査による探査，農村計画学会誌 33 巻論文特集号, 2016.
8) 伊藤 勝久：農山漁村住民・移住者の幸福を形成するもの―海士町における事例から―，第 10 回日中学術国愛セミナー論文集 10 13-26, 2014,
9) 野邊政雄：過疎山村に住む高齢女性の主観的幸福感 ： 岡山県鏡野町富地域の事例,教育実践学論集 14 123-134, 2013.
10) 国光洋二・津田渉・雑賀幸哉：農村活性化の取組みを通じた地域資源の保全に関する分析,農業土木学会誌 74 (3), 205-208,a1, 2006.
11) 松岡悦子： 高齢者の幸福感と自立をめぐって,現代社会学研究 16 43-61, 2003.
12) 小泉健： 満足度指標にみる農業農村整備事業の意義,農業土木学会論文集, (189, 437-445,a2, 1997.
13) 武内和彦：美しい国土の形成と農業・農村環境整備, 農業土木学会誌 64 (1), 43-46, a2, 1996.
14) 内田由紀子：<講演 6>「幸せ」とは何か? 未来の暮らしについて考える, 2002. https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/276783/1/17_063.pdf
15) あわえ：【特別対談】小田切 徳美 教授と語る｜農山漁村から見る地域と人の関わり方」, 2023.02.21 アクセス. https://awae.co.jp/column/8683/

(Received August 1, 2023)
(Accepted August 1, 2023)

RURAL VILLAGES AND THEIR EUDAEMONICS SEEN IN PAPERS

Masayoshi TANISHITA

In this paper, we examine how the number of papers on rural areas (agricultural villages), mountain villages, and fishing villages (fishing villages) has fluctuated over the past 30 years. And is the budget of the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (MAFF) related to this change in the number of papers? What is the percentage of papers that include the free words "happiness," "well-being," "worth living,"

"affluence," and "pride"? What percentage of these include the free word civil engineering? And what kind of discussion is taking place on the theory of happiness in rural areas? The results of this study were as follows. The results show that the number of papers on rural areas is decreasing. There is a correlation with non-public works expenditure and number of papers. The percentage of civil engineering is less than 10% of the total. Not many papers discuss happiness, well-being, fulfillment, affluence, and pride in farming, mountain, and fishing villages. We found that "connection" and "circulation" with nature, family, and neighbors constitute happiness.